

水★素★製★造★法

かんぺむさし ニニニ

SF
展
示
室

讀者者紹介欄

昭和23年金沢市生れ。関西学院大学社会学部卒業後、広告代理店にコピー・ライター等として勤務。昭和50年「SFマガジン」に発表された処女作『決戦・日本シリーズ』『昔で泣いてる』で一躍注目を集め、同年末作家として独立した。ユニークな発想をユーモラスかつシニカルなタッチでまとめあげる手腕にすぐれ、ナンセンスSFの系譜を継ぐ作家として着々その地歩を固めつつある。

著書に『決戦・日本シリーズ』『サイコロ特攻隊』『俺はロンメルだ』『ポトラッチ戦史』『建売住宅温泉峡』『笑撃空母アルバトロス』がある。

水素製造法

昭和五十三年六月十日 第一刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 かんべ むさし

発行者 徳間 康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(43)六二二一(代表)
振替東京四一四四三九二番

(「乱丁、落丁本は本社またはお買求め」
の書店にてお取り替えます)

水素製造法

かんべ むさしミニミニSF展示室

出品 目録

標本棚 3

とりそろえ 9 品目

標本棚 2

いろいろ 8 種類

標本棚 1

あれこれ 14 個

標本棚1あれこれ14個

●手錠7

●ピストル10

●ナイフ13

●薬物17

●盗聴器20

●棍棒24

●コードブック28

●鍵32

●質札36

●ドス39

●鑑定書43

●弾丸47

●モビール50

●鎗だらけ53

標本棚2いろいろ8種類

●跳躍61

●追悼インタビュー71

●結婚ごっこ78

●恋の往復便85

標本欄3とりそろえ9品目

●水素製造法 129

●貴様と俺とは 145

●何もしない会 161

●発散センター 173

●メニュー・サービス 185

●征伐バック 197

●百年の恋 213

●裏遊園地 225

●バジャマでお邪魔を 238

●校長先生とキューピッド 93

●テレビの女神 102

●金太郎変化 109

●甘い宴会 120

●あとがき 251

●初出誌一覧 254

装幀／和田 誠

標本棚1

あれこれ
14個



手錠

今度は手錠が誰にかかるのか、それが彼らの関心の的だった。

その日は、約一カ月後に迫っており、現在該当者を厳正に選定中のはずだったからだ。

「でもまあ、俺達にかかることはないよな」

一人が言った。

「何と言っても、俺達はただの民衆だもの」

民衆という部分を、彼はいくらか自嘲的に言ったので、他の全員はうなずき、該当者が誰であるのかを、口ぐちに予想しはじめた。

「やはり政治家だろうと思う。去年もその前もそうだったらしいからな」

「いや、今度は大金持じゃないか。賄賂をかなり使ってるそうだよ」

彼らは、そういったエリート達の名前を、反感をこめてあげていったが、所詮、自分達には無縁のことなのだという気持ちに、変りはないのだった。

「やめようやめよう。いくら考えたって、意味はないさ」

一人が言い、それで彼らは口をとじて空を見あげた。太陽が不気味に赤く輝いていた。

発表はまだなかったが、該当者が誰であるのかは、かなりの確度で伝わってきた。

「どうやら大金持らしいというのである。」

その証拠に彼の身辺にはわかにあわただしくなり、表情にも緊張がみなぎりだしている。

「やっぱりなあ」

人びとは言った。だってあいつは、かなり露骨な裏工作をしたって話だもの。手錠がかかるのは、まあ、当然だよなあ。

その日まであと一週間、太陽はますます赤く大きくなっている。

「さあ、かけてくれ」

彼は、にぶい銀色の小さな金属板の上に立ち、そこから突き出ている金属棒を両手で抱くように、手首をのびし組みあわせた。

顔は、隠しきれない喜びにほころんでいる。

長老が、草地から金属板の上にあがり、念をおした。

「ではいまから手錠をかけるが、覚えるべきことはすべて覚えたな。また、途中で誘惑に負けて、これはずそうとはしないな」

「勿論だ」

彼はうなずいた。

「さあ、早くかけてくれ」

ガチャリ、ピンと金属的な音がして、背より高い棒をはさむ彼の手に、手錠がかけられた。どうもがいても、金属板から降りることはできないのだ。

「では、頼んだぞ」

鍵を彼に握らせ、ため息をついて長老は金属板を降りた。

遂にその日その時刻がきた。太陽がある明るさを超した途端、見わたす限りの草原が、いっせいにむくむくと動き、天にむかつて伸び始めた。見る見る背丈ほどになり、花が開き、そして無数の小さな実がはじけだす。

「！」

歓声をあげて人びとはその実をひろい、次から次へと飲みこみだした。

この星で、年に一度はじけるこの実は、猫にとつてのマタタビのように彼らの嗅覚に訴え、どう我慢しようとしても、手をださしてしまうのだった。食べた者の八割から九割が死ぬとわかつているのである。

ほとんど道具らしい道具を持たず、政治家とは一年間皆を指導する者、大金持でさえ、以前やってきた地球人が残したガラクタを所有している者の称号である彼らにとって、その誘惑から逃れる手だては防御物を作ったり、火で焼きはらうなどということとは、考えもつかないことなのだった。

方法はただひとつ、この星でただ一カ所草の生えていない部分、地球人が残した着陸カプセルのフード上に立ち、彼らが置きざりにしていった「流刑者」がかけられていた手錠（鍵は彼のポケットにあつたのに、彼はそれに気づかず餓死してしまつたのだ）をかけ、歯をくいしばって誘惑に耐えるしかないのである。つまり手錠は、選ばれた特権者を守り、幸福を与える道具なのだ。

そして彼は次の一年、長老となつて知識を伝え、翌年の該当者を選ぶのである。

一年生きられる——それは大変な幸福なのだ。

彼らの自然寿命は、一年半だからだ。

ピストル

一人で住んでいるマンションに、小包が届いた。差出人は俺の知らない男である。

「何だろう」

開いてみると、ピストルが入っていた。名称や形式は知らないが、確かに本物のピストルである。実弾だっが入っている。

「死ぬということなのか。それとも、これで身を守れということなのだろうか」

俺はピストルを握ったまま、自分が現在おかれている状況を考えて、首をひねった。

ひどい時代になったものだ。

友人の死に関して疑問を表明しただけで、脅迫状が舞い込み、夜道で襲われかけ、保護と称して、私服の公安特捜隊員にしつこくまっわりつかれているのである。

つい一カ月ほど前、友人であり同業者である作家が不審な死に方をした。睡眠薬を多量に飲んでの自殺ということになっているが、俺達の誰ひとり、それを信じている者はいない。彼は殺されたに違いないのだ。

自殺するような男ではないし、当日の昼間俺達と会っていたときもそんな素ぶりは見せなかったし、何よりも、彼が戦鬪を放棄して死ぬはずがないのだ。

彼は、国家権力を相手に戦っていたのである。発端は、彼の書いた小説が軍事産業の内幕をあばきすぎていたため、情報出所に関して新設されたばかりの公安特捜隊から出頭を求められたことだった。拒否すると逮捕状が出され、家宅搜索を受けた。

そしてそこで、ある過激団体の機関誌や文書が発見されたため、相手ははっきりと公安事件としての追求を開始したのである。

法廷内外での争いがつづき、その双方に援軍がつき、遂にはデモによる負傷者、テロによる死者が出るまでに至ってしまった。

「資料として機関誌を入手することが、なぜいけない」

俺達同業者はそう言って彼を応援し、彼も、次の審理では決定的な陳述をすると言言していた。その矢先に死んでしまったのである。

「自殺であるはずがない。殺されたのだ」

俺達はそう声明し、俺も友人としてあらゆる機会に死因に対する疑問を表明した。

その結果が脅迫状であり、夜道の待ち伏せであり、特捜隊員の尾行なのである。

「気をつけろよ。隊じゃ、君に狙いをつけているらしいからな」

忠告してくれる男もいたが、俺は意見を変える気はなく、黙りこんでしまうつもりもない。彼だけではなく、事は俺自身の作家生命にもかかわっているのだ。

「ところで、どうしたものかな」

俺は送られてきたピストルを前に考えた。

やはり警察に届けるべきだろうか。根ほり葉ほり聞かれ、特捜隊にも連絡され、好機到来とばかりに大騒ぎされるのは眼に見えているが、不法所持しておくのも嫌だ。万が一特捜隊に家宅搜索で

もされた場合、その方が問題が大きくなるだろう。災難の芽は早目につんでおく方がいい。

「よし、とにかく届けよう」

そう決めて立ちあがりかけたとき、いきなりドアを蹴やぶって、特捜隊員が二人、踏み込んだ。た。

「動くな」

一人がどなり、畳の上のピストルを見てもう一人にうなずきかけた。

「やはり、タレコミどおりだ」

「見ろ、お前はこういう奴なんだ」

取調室で、昨日の隊員が俺に新聞を示した。

『ピストル不法所持。暴力団と関係か？』

そんな大見出しで、俺の顔写真と押収されたピストルが載っている。

「違う。本当に送ってきたんだ。だから届けるところだったんだ」

叫ぶ俺を見て、彼はニヤリと笑った。

「しかし、世間では、もうお前はこういう人間になってしまったんだよ」

もう一人の隊員が入ってきた。

「さて、これはもういらんだろう」

彼は言い、机の上の押収品をとりあげた。

そしてそれは、ずるりと彼のホルスターにおさめられた。ヤ・ラ・レ・タ！

ナイフ

やあ、いらっしやい。お待ちしてました。

ええ、そうです。私がそうです。

元アルジェリア駐屯パラシュート部隊の、はっは、いや、そうおっしゃるほどの名物男じゃありませんでしたよ。

まあ、どうぞ、なかへお入りください。

ちよっと失礼、この本を片づけますから。

ええ、そう、モーパッサンですよ。好きでしてね、彼が。特に掌篇コントが好きだな。

結末近くなると、早く知りたいという心と、おしいような気持とがあらそって、思わずペーパー・ナイフを持つ手がとまりますよ。

うん、そういう楽しみが、このフランス綴じにはありますね。アメリカ風のペーパー・バック、あれはどうも好きになれないな。

さて、お待たせしました。

どうぞ、お仕事にかかってください。

遠い国からこられて、大変でしたでしょう。

お役に立てればよろしいんですがね。

え、ああ、アルジェリア時代のことを、ああ、なるほど、ふむふむ。

いや、アルジェリアのパラシュート部隊といえばね、これは皆さん、粗野で無教養で荒くれぞろいと、こう思ってたっしやるようだけど、そんなことはない。そんなことはありませんよ。

みんな、ごく普通の、つきあって気持ちのいい奴ばかりでした。バイオリンの名手もいましたしね。もつとも、熱気と湿気で音が狂って仕方がないって、こぼしてましたが。

サムムといって、一種の季節風ですな。

多湿の熱風。あれが吹くと、バイオリンどころか、こっちまで狂いそうになったものですよ。いらしましてねえ。

おっと、話がそれましたな、失礼。

で、まあ、みんないい奴ばかりでしてね。乱暴者の集団と伝わっているのは、仕事だけで判断したからじゃないですかね。

それと、個人とは関係ないと思うんだが。

フランスの利益を守るといふ大前提があるでしょう。そして、そのためにはアルジェリアの独立は認められないと、これが国の方針ですよ、当時の。

じゃあ、それに従って独立派を取締るのは、私たちの仕事に義務として当然のことですからねえ。え、何ですか。ああ、ええそれは、少々手荒いこともしましたがね。まあ、何と言っても、戦争ですからね。

私ですか。ああ、何人か処分しましたよ。

銃のこともあったし、手榴弾のこともあったし、そう、ナイフの場合もありましたな。